

4. 新屋敷遺跡における近世の一様相

1. 出土錢貨について

錢貨は総数24枚が出土している(第319図)。その内訳は、渡来錢12枚(五銖錢1枚、開元通宝1枚、至道元宝1枚、祥符通宝1枚、天聖元宝2枚、皇宋通宝1枚、熙寧元宝1枚、元豐通宝3枚、政和通宝1枚)、本邦錢8枚(寛永通宝8枚)、不明銅錢1枚、不明鉄錢3枚である。

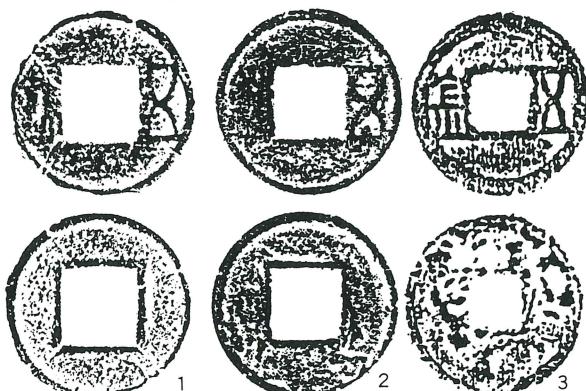
このうち渡来錢は1の後漢以降に鋳造されたと考えられる五銖錢と2の唐錢の開元通宝が出土しているほかは、北宋錢によって占められている。また本邦錢は小片を含め寛永通宝が8枚出土している。寛永通宝は寛永3年(1626)から明治2年(1869)までの約240年間に亘って各地で鋳造され、明暦2年(1656)以前に鋳造されたものを古寛永、寛文8年(1668)以後に鋳造されたものを新寛永と称している。前者は錢文が闊字で宝字の足がス宝、後者は錢文が細字の傾向を示し、宝字の足がハ宝であることを特徴としている。全体の判明する6枚の寛永通宝のうち15~17が古寛永、13~14・18が新寛永である。

最初に各々の錢貨の特徴について検討したい。まず1の五銖錢は出土例が稀少であることから、やや詳しく述べることにする。

五銖錢は、前漢の武帝の元狩年(119B.C.)に鋳造されたのが最初と言われている。前漢滅亡後、新の王莽によって廃止されたが、後漢の光武帝によって建武16年(40)に復活し、その後、隋まで改鑄を繰り返しながら使用してきた。形式や字体に変化が大きく、多種多様なものが認められている(奥平1983)。

その形態的特徴は両面に周郭をもつが、裏面にのみ方郭が認められる。周郭は腐食のため一部欠損し、錢外径2.55×2.54cm、穿0.99×0.95cm、郭厚0.11cm、重量1.56gである。色調は淡い緑色を呈し、表面が全体に擦れ、非常に薄い。その鋳造年代については日本貨幣協会の高木繁司氏の鑑定によれば、五の字が双椀型で然も形が崩れ、銖字の朱の上部が円折であることや

第335図 埼玉県内出土の五銖錢



1. 鴻巣市新屋敷遺跡出土 2. 坂戸市中里出土
3. 岡部町会昌寺出土 (原寸)

背郭の形状等の特徴から後漢以降の三国末から晋の初め頃のもので、正しくは西晋代(265~316年)のものであろうと御教示を頂いた。

なお、県内における五銖錢の出土例としては中世の備蓄錢の中に含まれていた例が和光市白子、坂戸市中里、東松山市高坂等で確認されているにすぎない(栗原1984・1990)。また、大里郡岡部町全昌寺境内より出土した備蓄錢の中に五銖錢の一変種とされる五金が出土地している(栗原1988)。

2は唐の開元通宝で、背に「桂」の文字がある。開元通宝のうち武宗の会昌5年(845)に補鋳したものには背文字があり、紀地錢あるいは会昌開元錢と称されている。背文字は鋳造地の地名を一字入れたもので、「桂」は嶺南道桂州(現廣西省桂州市)が鋳造地であることを示す。

3~12は北宋錢である。3は至道元宝(草書)、4は祥符元宝、5~6は天聖元宝(5真書、6篆書)、7は皇宋通宝(篆書)、8は熙寧元宝(篆書)、9~11は元豐通宝(9行書、10~11篆書)、12は政和通宝(篆書)である。

13~20は寛永通宝である(註1)。15~17は古寛永で、文字が比較的大きく、内郭をはさんでいっぱいに書かれた特徴から明暦2年(1656)江戸鳥越所鑄錢の

「鳥越銭」と推定される。鳥越銭は寛永17年の鋳造停止から16年後の明暦2年に解禁となって鋳造されたものである。

13・14・18は新寛永である。13は寛文8年江戸亀戸所鑄銭で、背に「文」字を配した俗称「文銭」である。14はやや不鮮明であるが背に年号の元文を表す「元」字を配した、元文摂津高津新地所鑄銭である。元文5年に鋳造の許可を得て、翌寛保元年（1741）に鋳造が開始されたと言われている。18は重揮通無背の特徴から享保陸奥仙台所鑄銭と推定される。銭座は石巻で、初鋳年は享保13年（1728）である。

次に、各遺構から出土した銭貨の様相について若干検討してみたい。ここでは参考資料としてA区の出土例についても併せて検討を加えることにする。

a. 北宋銭以前の銭貨と北宋銭の伴出例

第65号溝からは1の五銖銭と3の至道元宝が出土している。その出土位置は第65号溝が第4号墳の北側周溝と重複した部分から出土したもので、出土状況の詳細は明確でない。しかし、両者は比較的近接した位置から出土しており、同時期に溝の中に投棄されたものと推定される。なお、この溝は17世紀後半代の屋敷に伴う区画溝の一部と考えられ、何らかの祭祀行為に関わる可能性も考えられる。

この他にR-19グリッドから2の開元通宝が単独で検出されている。

b. 北宋銭を主体とする出土例

北宋銭のみの組み合わせ例には第25号墳例がある。第25号墳の北側周溝内から5・6の天聖元宝と10の元豊通宝がまとまって出土した。5・6は背を合わせた状態で癒着していた。第25号墳の周辺には多数のピットが検出されており、これらの銭貨もピットに埋納されていた可能性が強い。

このほかにA区の調査の際に検出された第3・4号地下式壙から北宋銭がまとめて出土している（田中1994）。第3号地下式壙の床面から銭貨9枚（咸平元宝1、祥符元宝2、景祐元宝1、紹聖元宝1、元符通宝1、不明銅銭2、寛永通宝1）と中世陶器が出土して

いる。このうち寛永通宝は覆土中からの出土であり混入の可能性が強い。第4号地下式壙からは銭貨15枚が出土している。その内訳は、唐国通宝1（南唐959年初鑄）をはじめとして、北宋の祥符通宝1、天聖元宝1、皇宋通宝1、至和元宝1、治平元宝1、治平通宝1、熙寧元宝1、元豊通宝2、政和通宝1他である。この2基の地下式壙は伴出した中世陶器から13世紀後半から14世紀前半の所産と考えられる。

c. 北宋銭と寛永通宝の伴出例

北宋銭と寛永通宝が出土した例としては、第44号住居跡、第1号溝がある。

第44号住居跡の覆土から11の元豊通宝と16の古寛永が出土している。覆土中からの出土であるため出土状況の詳細は不明である。また第1号溝からは9の元豊通宝と15の古寛永が出土しているが、出土位置・状況等が明確でなく性格については不明である。このように北宋銭と寛永通宝の伴出例に関しては良好なものが多く、寛文10年（1670）に渡来銭禁止令が出されたこととあながち無関係ではないであろう。

d. 寛永通宝のみの出土例

第76号土壙からは多量の陶磁器、鉄釘等の遺物と共に13の寛永通宝の「文銭」が1点出土している。其伴した陶磁器類には輸入磁器の皿をはじめ、伊万里産の青磁皿、唐津産の京焼写し丸碗、瀬戸・美濃産の鉄釉天目茶碗等が出土している。陶磁器類の推定年代は概ね17世紀後半代を中心としており、文銭の鋳造期間とされる寛文8年（1668）から天和3年（1683）に一致することから、年代的な指標になるものと思われる。

e. その他の出土例

第73号溝からは、21の不明銅銭が1枚出土している。腐食が著しく、銭文が全くないことから、無文銭と思われるが、穿の形態が長方形に近く、座金具などの銭貨以外の可能性も残されている。

他に鉄銭と思われるものが第48号土壙から2枚、第39号井戸から1枚出土している。第48号土壙は土層観察の結果、桶状の埋設物の存在が推定されるもので、鉄製の毛抜き、鉄釘等が伴っていた。六文銭的な性格

も考えられるが、墓としての認定は難しい。

以上、簡単に出土銭貨の様相について整理を試みた。中でも第65号溝出土の五銖銭は類例の少ないものとして特筆される。溝に投棄された時期は限定できないが、近世段階における廃棄例としてその性格が注目される。また第76号土壙から出土した文銭についても一括性の高い廃棄土壙に伴う例として留意される。

2. 焼塩壺について

今回の調査において焼塩壺の身4点と蓋1点が溝、土壙、井戸等の遺構から出土した。焼塩壺に関しては渡辺誠氏が精力的に研究を進めているので、氏の研究成果に準拠しながら、若干考察を加えたいと思う（渡辺1985a・b、1992）。

焼塩壺とは、焼塩をつくる際に使われた小型の素焼の容器のことである。焼塩は臼で細かく粉碎した粗塩を素焼の容器（焼塩壺）に入れたまま焼くことによって塩のニガリをぬいた上質の精製塩である。当時、壺入りの焼塩は産地直送の高級品とされていたため、出土遺跡は武家屋敷跡や寺社跡などの限定された遺跡から主に出土している。

C区の調査において焼塩壺は第1号溝（第291図）、第94号土壙（第296図）、第16号井戸（第316図）、第41号井戸（第317図）から身が各1点ずつ出土している。また、第76号土壙（第295図）から焼塩壺の蓋が1点出土している。

出土した身は、いずれも渡辺分類のA類に分類される、古式のタイプである。筒形で、口縁部がややすぼまる器形で、成形は布を巻きつけた心棒に粘土紐を輪積みにしたものである。胴部外面は横ないし斜め方向に撫で調整を施し、内面調整はやや粗雑で、粘土紐痕が明瞭に残り、横方向の撫でを施している。内面の布目痕の残りは良くない。口縁部はやや外反し薄く仕上げられ、端部はやや尖り、内外面に横撫でを丁寧に施し、蓋受けはない。底面は押圧により平坦となる。器肉は1cm前後と厚い。口径は6.2～7cm、器高は10cm前後を測る。

胎土は砂・小礫を多く含み、白色粒子の混入が目立

第336図 新屋敷遺跡出土焼塩壺刻印



1. 第41号井戸 2. 第16号井戸
3. 第1号溝（原寸）

つ。焼成は良好である。色調は外面は明橙褐色を呈するが、内面は塩焼けのためピンク色に変色し、二次焼成時に中に塩が入っていたことを示している。

刻印は、I：枠線一重の「天下一堺ミなと 藤左衛門」1例（第41号井戸）、II：枠線一重の「天下一御壺 塩師 堀見なと伊織」2例（第1号溝、第16号井戸）の2種類が認められた（第336図）。

他に焼塩壺の蓋が、第76号土壙から出土している。手捏ね成形による薄手皿形の被せ蓋で、口径7.6cm、器高1.5cmを測る。口縁部は外方に開き、上面は平らである。口縁部には横撫でが施され、上面は板押圧痕が見られる。この蓋は渡辺氏による分類のA類に相当し、身のA類に伴うものと推定される。

次に、刻印を中心とした焼塩壺の製作年代について検討したい。

渡辺氏の焼塩壺の分類によるA類の系譜は、泉州大島郡湊村（現堺市西湊町周辺）におこり、のちに大阪・難波屋を通じて販売されるようになった系列に相当する。

最初は「ミなと 藤左衛門」の小さな方形の刻印であったが承応3年（1654）に女院御所より「天下一」という美号を貰い、「天下一堺ミなと 藤左衛門」という刻印に変わった。その後『堺鑑』によれば、それに続いて鷹司殿より伊織という名前を延宝7年（1679）に拝命したことが記されており「天下一御壺 塩師 堀見なと伊織」に変わったようである。ところが、天和2年（1682）9月に「天下一停止」という幕府の禁令

第337図 焼塩壺の編年（渡辺1992）

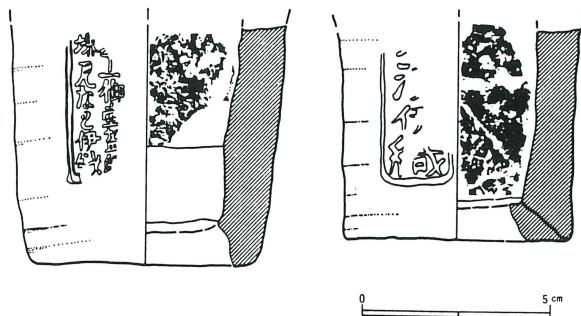
	泉州湊村→大阪・難波屋	堺・奥田氏	泉州麻生	赤穂	深草	木野
1600	天文令中（1532-54） 堺太夫塙焼塩始める				1593(文禄2) 焼塩・花形塩	
1654(承応3) 天下一						
1679(延宝7) 伊織押名						
1682(元和5)9月 天下一禁止 1692(元禄5)本朝食盐						
1700						
1738(元文3) 9代伊織押名 8代既に難波進出						
1796(寛政8) 和泉名所因縁						
1800						
1816-17(文化13-14) 拾遺泉州志						
1900						
1903(明治36) 内国勧業博覧会・弓削跡七						
		奥田利吉				民俗資料

が出て、「天下一」という言葉が使えなくなり、「御壺塩師 堀湊伊織」に刻印が変化したことが渡辺氏の研究によって明らかにされている（渡辺1985a・b、1992）。従って、Iの「天下一堺ミなと 藤左衛門」の刻印は1654～79年の間、IIの「天下一御壺塩師 堀見なと伊織」の刻印は1679～82年のわずか4年しか使われていないことになる（第337図）。

このように出土した焼塩壺の年代は、その形態及び刻印の検討から17世紀後半で限定された年代を与えることができ、伴出した肥前産の陶磁器類との年代観とも概ね符合している（大橋1989）。

管見にふれた県内における焼塩壺の出土例としては関東郡代伊奈氏の陣屋として広く知られる川口市赤山陣屋跡から「天下一御壺塩師 堀見なと伊織」、「泉湊伊織」（18世紀後半）の刻印をもつ焼塩壺が出土している（川口市1986）。また川越市域では東明寺遺跡から「泉湊伊織」、宮下一丁目遺跡から「泉州麻生」（17世紀後半から18世紀前半）の刻印をもつ焼塩壺が出土してい

第338図 川口市赤山陣屋跡出土焼塩壺



る（註2）。

焼塩壺を出土した遺跡をみると城跡及び武家屋敷、有力な社寺の境内等に集中する傾向が認められ、一般庶民の生活遺跡からは出土する例が少ないと指摘されている（渡辺1985b）。おそらく、壺詰めの焼塩は当時としては高級食卓塩として、贈答品などに使われていたのであろう。

このように焼塩壺はかなり階層的に限定された遺跡から出土する場合が多く、新屋敷遺跡の性格を検討していく上で重要な示唆を与えるものである。

3. 遺構の変遷について

新屋敷遺跡では、これまでの数時に亘る調査において多数の近世に属する遺構が検出されている。しかし、必ずしもその全体像が明らかにされているとは言いがたい。その要因としては後世の開発などによって削平され、消滅してしまった遺構が少なくないことが挙げられる。とりわけ礎石をもつ建物跡の検出が困難であること、また出土遺物が少なく各遺構の所産年代を想定することが難しいことなどが指摘される。

しかし、先述したように年代的指標となり得る陶磁器類をはじめとして、焼塩壺、錢貨等もわずかではあるが出土している。また、掘立柱建物跡や棚列等は配置、規模、主軸等の検討から同時期に存在した蓋然性の高い遺構群が抽出され、これらの建物に付属する区画構や井戸等の存在も確認されている。さらに、遺構相互の切り合い関係から先後関係が明らかにされ、大まかな時期的な変遷をたどることが可能である。

そこで近世を中心とした屋敷地の変遷について、その概略を示し、併せて鴻巣御殿及び鷹部屋等との関連

性について若干の検討を行いたいと思う（第399図）。

I期

当該期の遺構の主体は、上位段丘面上に存在する二重に巡る構堀によって区画された方形館がある。

内堀はA区の調査時に第22号溝と呼称されたもので、幅3.9m、深さ2mの箱築研堀である。規模は長辺約35m、短辺約34mのほぼ正方形を呈し、東辺と南辺の二か所に土橋を有するものと思われる。

外堀は内堀から35~45mほど離れた位置を巡る、幅3.7m、深さ1.8mの箱築研堀である。A・C区の調査時において第1号溝と呼称されており、内郭の主軸に対して僅かに西に傾いている。

外堀の南辺部分の状況については、調査区域外に延びているため明確でないが、北辺部分を第2号溝と交差する一段深く掘り込まれた部分までとして把えれば、北辺長約90mの東側に開口したコの字形の外堀が想定される。しかし、堀の断面形態の類似性からC区東側で確認された第73号溝をこの方形館に関連した堀跡と仮定すれば、北東部分で堀跡が一部途切れてしまうため問題を残すが、約128m四方の大規模な外郭を形成していたものと復元される（註3）。

郭内からは地下式壙及び井戸が数基検出されているだけで建物等は確認されていない。このうちA区第3・4号地下式壙からは北宋錢と中世陶器が出土しており、出土した常滑産の壺は13世紀代に比定されている。またA区第2・3号井戸からは青磁の破片が出土しているが、これらの遺構と構堀との関連については現状では不明である。

鴻巣市教育委員会の実施した第2次調査の成果によれば、堀跡が埋没した段階に掘り込まれた土壙の中から17世紀後半の天目茶碗が出土しており、既にこの時期には構堀としての機能はなくなっていたものと想定されている（鴻巣市1989）。またC区の調査でも第1号溝から出土した遺物の大半は、溝の廃絶時期とされる17世紀後半代のもので、その他には15世紀代の瀬戸・美濃系の卸皿が1点検出されているだけである。

山崎武氏は、鴻巣市域における中世館跡を検討する

中で新屋敷遺跡の方形館についてもふれている。山崎氏は館の造営年代を郭内から出土した金銅製懸仏や常滑、布目瓦等の年代から15~16世紀代に位置づけている（山崎1995）。しかし、前述したように構堀の掘削時期を示す良好な遺物が少なく、下限がおさえられているにすぎない。現状では、堀の形態的特徴等からみて戦国時代末から近世初頭を中心とした時期に位置づけるのが妥当ではないかと考えられる。

さて、この方形館を『新編武藏風土記稿』に記載されている鷹部屋に比定する見解が認められる。鷹部屋の設置時期については、文禄2年（1592）に造営されたと伝えられる鴻巣御殿と相前後して設置されたものと一般に考えられている。しかし、前述したようにこの方形館は鷹部屋設置以前に既に存在していた蓋然性が強い。しかし、鷹部屋設置時にその施設の一部として、この方形館が取り込まれた可能性は否定できないであろう。

II期

当該時期には上位段丘面南側の平坦部に第2号溝と第70号溝によって区画された、北辺に入口を設けた屋敷地が形成される。その規模は、第2号溝の南端が調査区域外に延び、第70号溝もD区内へ直線的に延びているため明確でないが、東辺長93m以上の比較的大規模な占地面積であったと推定される。

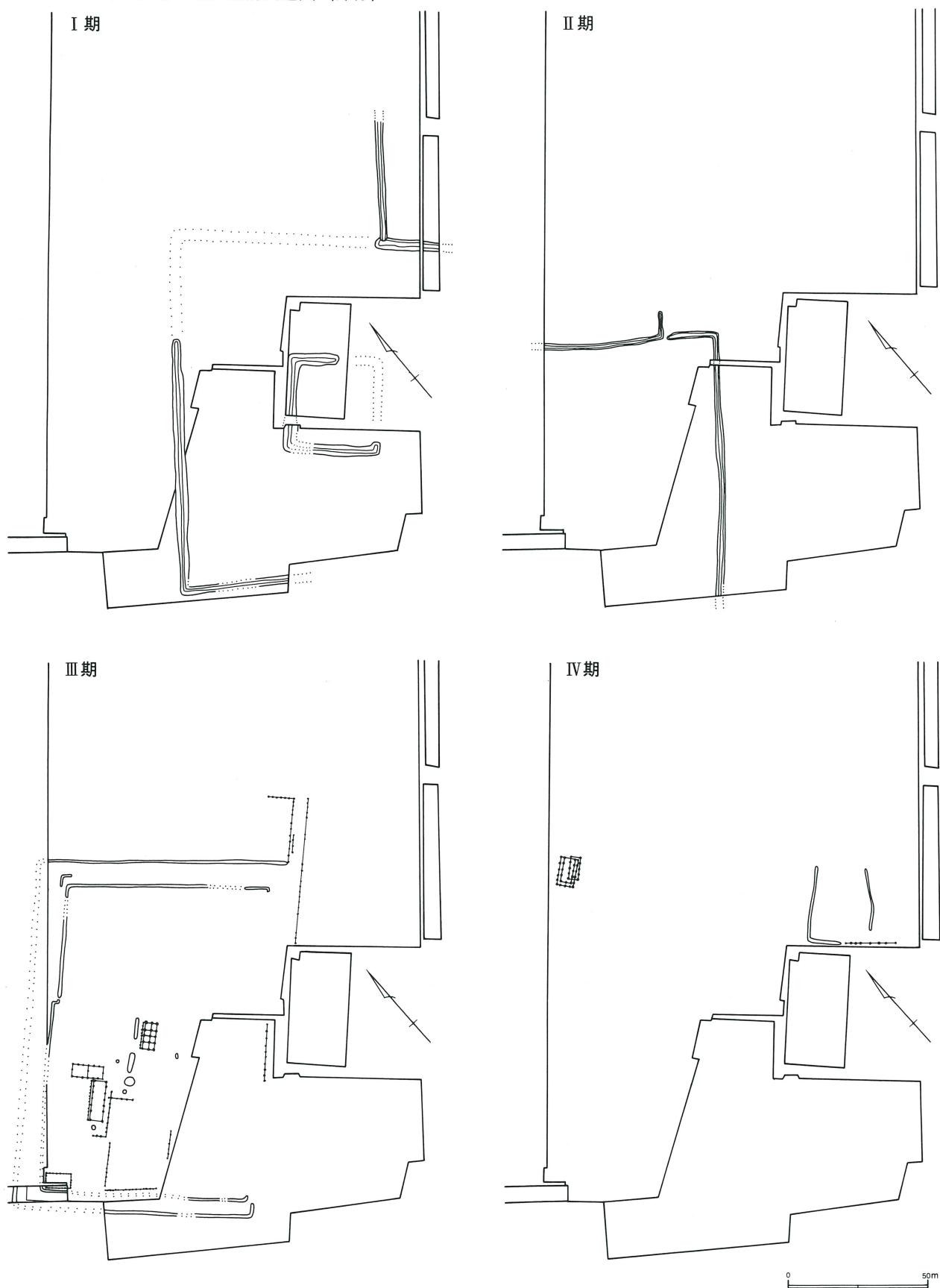
区画内にこの段階に該当する明確な遺構は指摘できないが、第2号溝はA区南西端とC区南側の2か所で第1号溝と切り合い、新旧関係は第1号溝よりも新しいことが確認されている。またIII期の屋敷地を区画する第7・9号溝とA区の南西端で切り合い、それに切られていることから、暫定的にIII期に先行する屋敷地として位置づけておきたい。

時期的な位置づけは、出土遺物が少なく判然としないが、前後の時期との関連からここでは17世紀前半を中心に想定しておきたい。

III期

この段階が屋敷地としては最も充実した内容を示している。すなわち、標高16.5mラインを南東から北西

第339図 新屋敷遺跡近世遺構変遷図（部分）



に向かって走行する第60号溝と第62・63号溝によって二重に区画された屋敷地の存在が推定される。

内側を巡る第60号溝は、南東端部がL字形に短く屈曲し、北東辺長約71.6mを測る。北西辺は第70号溝と重複する部分でクランク状に屈曲して調査区域外に延びる。そしてD区を縦断しながら、第5次調査区内で南東方向に屈曲して、A区第9号溝に接続するものと思われる。北西辺の長さは約107.6mであろう。

また外側を巡る第62・63号溝も同様に長方形の区画溝を構成している。北西辺の状況はD区の調査成果に期待されるが、基本的には第60号溝の外側約6~10mをほぼ並行に巡り、南西辺はA区第7号溝に接続するものと思われる。その規模は外周部分で長辺約125.6m、短辺84.8mの南東辺が開口した長方形の屋敷地が想定される。

次に柵列の状況を見ると、第12号柵列は第62号溝の内側に設置された形をとることから目隠柵の可能性が高い。また第2・11号柵列も第9号溝の延長上の内側に位置し、同様に目隠柵と考えられる。さらに、南東辺上には第1号柵列と第7・9号柵列が配置され、屋敷地を区画している。また第7号柵列の東辺は第62・63号溝のさらに外側を区画する塀であった蓋然性が強い。ほかに第7号柵列の南東側約5mを北東から南西方向に延びた第8号柵列もその配置状況から当該期に位置づけられるものと思われる。

この屋敷地に伴う建物群としては、出土遺物の検討から調査区南側の平坦面上に位置する第4~6・13号掘立柱建物跡の4棟が想定される。付属施設としては第2~6・10・11号柵列が配置状況から建物群に関連したものであろう。また、第4号掘立柱建物跡に付属するように廃棄土壙的な性格を示す第76・82・94号土壙が営まれているほか、第41・43・44号井戸等が存在していたものと思われる。

しかし、第5・6号掘立柱建物跡のように近接しそぎて、同時共存の難しいものもあり、図示した各遺構が必ずしも同時期に存在していたことを意味するものではないことを断っておきたい。

この段階の屋敷地の性格を復元する上で問題となるのは、第1号溝の中に営まれた土壙墓（第81号土壙）の存在があげられる。第81号土壙は、第1号溝がほぼ埋没した段階に営まれた土壙墓で、型紙摺による菊水文の御深井釉香炉と刀子、鏑子を副葬した壯年の女性が埋葬されていた。屋敷地内に単独で営まれた土壙墓として、その特殊性が注目される。

当該期の年代は、出土した陶磁器類、焼塩壺、銭貨等から17世紀後半代を中心に形成されたものと推定され、下限は18世紀代に一部かかるものと思われる（註4）。この時期は鴻巣御殿の廃止時期と想定される元禄年間に重複しており、大規模な屋敷地成立の背景に鴻巣御殿との密接な関連が予想される。

IV期

出土遺物の検討から当該期に比定できる遺構には、調査区中央の第77・78号溝、第13号柵列、調査区北側の低位面に所在する第21号井戸等が挙げられるだけである。当該期になると前代に大規模に展開した屋敷地は規模を縮小したようで、低位面及び上位段丘面上に小規模な遺構群が展開している。また、第12号柵列との切り合い関係から第10・11号掘立柱建物跡が当該期に該等するものと想定される。両者の先後関係については、柱穴覆土の状況から第11号掘立柱建物跡から第10号掘立柱建物跡に建て替えが行われたものと思われる。第10号掘立柱建物跡の柱穴覆土には浅間A軽石が確認されており、建物の一部が19世紀代まで存続していたことが知られる。

当該時期の年代に関しては、出土した陶磁器類の年代観から18世紀後半から19世紀前半を中心に位置づけられる。C区の調査区域内には当該期の遺構の分布が全体に稀薄となることから、北西に隣接したD区に屋敷地の中心が移行したものと推測される（註5）。

このように新屋敷遺跡における江戸期の様相の究明はまだ緒についたばかりであり、種々の問題点が山積されている。しかし、今回の調査により、溝や塀等によって区画された大規模な屋敷地の存在が確認され、

さらにその内部に掘立柱建物跡や井戸等によって構成された居住空間が確認されたことは大きな成果と言えよう。また出土遺物の内容についても、御府内の武家屋敷に何ら遜色のない遺物相の一端が窺われ、この遺跡の性格を考える上で重要な示唆を与えている。

新屋敷遺跡における江戸期の様相は、鴻巣御殿との密接な関連のもとに展開しており、今後は南側に隣接する生出塚遺跡をはじめ、周辺における当該時期の遺跡の様相を含め総合的な検討が必要であろう。

<註>

- 註1 寛永通宝の分類については郡司勇夫1981『日本貨幣図鑑』東洋経済新報社を参照した。
- 註2 川越市立博物館学芸員岡田賢治氏の御教示による。
- 註3 外堀の南西辺の一部が平成6年度に鴻巣市遺跡調査会によって発掘調査されている。その調査結果から外堀の南西辺の長さは100mを越すことが確かめられている。鴻巣市教育委員会山崎武氏の御教示による。
- 註4 このうち第94号土壙から出土した肥前磁器の「宣明年製」の銘款は1660~1680年代の製品に多く見られるものである。また第43号井戸から出土した磁器碗の「大明年製」の銘款も17世紀後半に出現し、18世紀まで継続して用いられていたと指摘されている（大橋1989）。
- 註5 新屋敷遺跡D区の調査成果については、調査担当者の昼間孝志氏に御教示いただいた。

<引用・参考文献>

- 大橋康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 奥平洪昌 1938『東亜錢志』
- 川口市 1986『川口市史』考古編 川口市史編さん室
- 栗原文蔵 1984「埼玉出土の中世備蓄古錢について」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第6号
- 栗原文蔵 1988「埼玉出土の中世備蓄古錢について（補遺）」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第10号
- 栗原文蔵 1990「坂戸・中里出土の備蓄古錢」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第12号
- 郡司勇夫 1981『日本貨幣図鑑』東洋経済新報社
- 鴻巣市 1989『鴻巣市史』資料編1考古 鴻巣市市史編さん調査会
- 田中正夫 1994『新屋敷遺跡－A区－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第140集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中国科学院考古研究所 1959『洛陽焼溝漢墓』
- 永井久美男 1994『中世の出土錢－出土錢の調査と分類－』兵庫埋蔵錢調査会
- 山崎 武 1995『伝源経基館跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第7集 鴻巣市遺跡調査会
- 渡辺 誠 1985a「焼塩」『講座・日本技術の社会史』第二巻 塩業・漁業 日本評論社
- 渡辺 誠 1985b「物資の流れ－江戸の焼塩壺」『季刊考古学』第13号 雄山閣
- 渡辺 誠 1992「焼塩壺」『江戸の食文化』 江戸遺跡研究会編 吉川弘文館